
官 - The fantastic girls photoed in the summer -

夜桜 野鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想写真館 - The fantastic girls photoed in the summer -

【Nコード】

N2332Y

【作者名】

夜桜 野鈴

【あらすじ】

新人ルポライター芥川春樹。彼はひよんな意思で失われた里、『幻想郷』に神隠しされてしまう。

そんな中、彼は様々な幻想郷の暮らしを知り、写真に納めいつしか彼の過ごした夏は人生でかけがえのない思い出となっていく。平和な幻想郷を漫遊した男のルポルタージュ。

あの夏は暑かった。

今年の夏は暑かった気がする。

自己紹介から始めようか。

僕の名前は芥川春樹。ルポカメラマンとして今年の春に大手出版社に就職した大学上がりの22才だ。

自分のデスクの引き出しを開け、封筒に入った数十枚の写真の束を取り出す。

その写真に写っていたのは色とりどりの光の中を舞う少女たちだった。

そう、これを撮った去年の夏も暑かった。

平成22年6月下旬。

梅雨が明けてすぐ、蝉はけたたましく鳴き始め、陽射しは真夏の色を帯びた。

大学最後の年となった僕は、某県の山に風景写真を撮りに登っていた。

舗装された山道は、既に完成していて美としての追求性を僕は感じるができない。あえて獣道を進み、その先にある何かを撮ることを僕はよく行っていた。

この日もそうだった。しかし、いつもと違い、自分の意思と言うよりは、『誰かに呼ばれた』ような気がしてふらふらと獣道のほうへ入っていったのだ。

ほぼ無意識だったと思う。気がついたら、屋根も落ち、瓦は割れ、雑草は茫々と繁り、蜘蛛の巣は太く張り巡らされた廃社に辿り着いた。

「美しい……」

僕はそこに底知れぬ美を感じた。共感されることはないだろう。しかし、自分の感性に大きな衝撃を与えたのだ。

僕は夢中でシャツターを切った。

「もしこれが過去の栄華を取り戻したらどれだけ素晴らしいだろうか……」

言っただけで違和感を感じた。風が変わったのだ。

この世からは絶滅してしまった風。

僕は思わず振り向く。

光景にシャツターを切ることも忘れていた。

割れて歩き難いであろう石階段はキレイに整頓され、朽ち折れていた元の色も分からぬ鳥居は、朱に塗られ荘厳に聳えていた。

違和感よりも己がふと口にした言葉が真になったことに僕は戦慄した。

もう一度振り返り返り社のほうを見れば、草は萎まれ、瓦は整列し、蜘蛛の巣一つ無くなっていった。

空の色も澄み、喧騒さえない。微かに聞こえる遠くの声は騒がしいのではなく活気の音だ。

「あら……また外の人？」

にしてはまだパニックになってないのね。冷静なのかしら。

それとも鈍いだけ？」

後ろから少女らしき声が聞こえる。

どうやら階段を上ってきたらしい。

「僕はどちらかと言えば鈍い人間ですよ」

本日三度目の振り返りの前に居たのは、ノースリーブの巫女服という、なんとも前衛的なファッションの少女だった。見た目的には16、7だろうか。

夏ということもあり、露出の多い仕様になっているのだと思うが、健康的な汗を浮かべる肌には目のやり場に困る。

「なるほどね。じゃあ端的に言うわ。ここはこの世であってこの世でない。」

あなたは神隠しに遇いました」

「……………予想はしてたから驚かない、かな」

己の言葉が現実になった時点で粗方の整理は頭の中で着いていた。「なら話は早いわね。」

夏で良かったわ、紫も冬眠してないからすぐに変えられると思う」「簡単に帰れるんだ……………」

拍子抜け。

小説などの展開では『〜』が終わるまで帰れません』なんて設定があるけど流石は現実。やれそうなのが出来なくて、出来なさそうなことがやれる。

「その人帰るつもりはないと思うわ」

どこからか声が聞こえる。

「こちらよ。芥川さん」

足下が裂け派手な服装をした少女　　と云えば少女だが、雰囲気がおば……………妙齢の女性と言うのが当て嵌まる少女がぬつと現れた。

「どうということ、紫？」

この人が帰るためのキーパンソンの紫さんか……………。

「そんなことより僕の名前何で知ってるんですか？」

日傘を虚空から取り出して開く。もう神隠しに遇った時点で大抵の驚かないが、不思議には思う。

「二人の問いには両方一言で答えることが出来るわ。」

何故なら、私が呼んだからよ」

僕は内心「ああ、なるほど」と思っていた。廃社まで言ったときの変な感覚は気のせいでは無かったのか。

「芥川さん……………だっけ？ あんた何一人で納得してんのよ。」

面倒だからもつと端的に説明して頂戴」

「私は彼の意味を尊重したの。好奇心ではなくて、清潔さをもった写真への想いを汲み取っただけよ」

つまり僕は、写真への想いで紫さんの気を引く　紫さんの何らかの手助けで神隠し、という状況だということか。

「帰るのはいいけど、彼の意思は力強くて……。彼の意思に反する時、私の境界は効果を為さないみたい。」

数100人に1人の確率で存在するから珍しいことではないのだけれど」

「ああもう！　紫の言ってることまどろっこしいわ。」

要は彼が心から帰りたいたいと思えば帰れるのね？」

そういうこと、と紫さんが返す。

「正直、僕は帰る気ないですよ。ここの美しさを撮るまでは」

その発言をした瞬間、場が凍った。真夏なのに。

「うふふ、貴方やっぱり面白いわ」

「ここまでくると鈍感な罰せられるべきだと思つた」

なにか失敗したことは伝わった。何を失敗したのかは理解できないけど。

「という訳で霊夢、貴女危険な場所で撮影するときは護衛してあげなさい」

「嫌よ、死にたきゃ勝手に死ねばいいわ」

それでも巫女なのか……。

「駄目、私は芥川さんが気に入ったの。他の妖怪たちに食べられたりしたら悲しいわ」

「そこまで言うなら紫がすれば良いじゃない」

「それも駄目。私はやることがあるの」

「何よ？」

「お昼寝」

霊夢が払い棒で一閃するがそれよりも早く地面に境界を作り逃げ込んだ。

「冗談よ。芥川さんの荷物取りに行くのよ」

あ、そういえば替えのフィルムも少ししか持ってない。

「というか、僕の自宅分かるんですか!？」

「あ、初めて感嘆符付きで驚いた」と、霊夢。
「そこは驚くのね。」

分からないわ。だから住所教えてくれるかしら？」

「外の世界の住所なんて分からないんじゃない……」

「大丈夫よ、Googleがあるんだから」

紫さんは現代にも居るようだ。もし帰ったらネットカフェでも覗こう。紫さん居るかも。

紫さんに住所を教えると境界を閉じて地面は何事も無かったかのようにならなくなった。

「霊夢さん、で良いんですね？」

「霊夢で良いわよ」

「じゃあ霊夢。ここはなんて名前の里なんですか？」

「ここは『幻想郷』。人と人でない者の共存する失われた里よ」

「失われた……」

「そう、空想の生き物は居ないけど、幻想の生き物、つまりは妖怪なんかの失われた生き物は外の世界にいないけど此方側にいる」

「じゃあ紫さんも？」

「紫はもつと特別。幻想郷が隔離される時から居て、幻想郷の隔離計画に一役かっている古参中の古参だから」

「幻想郷っていつ頃隔離されたんですか？」

「明治時代って言われてるわ」

「明治 と考えると歳は……」

「あまり考えないほうが良いわ。噂では創世記時代から生きてるのか。」

「冗談だと思っけど」

妖怪というより神の領域なんじゃ……。

「ところで、住むところ無いわよね？」

「あ……はい」

「しょうがないわね」

「神社に住まわせてくれるんですか？」

「あんだ変態？ 男と女が一つや屋根の下なんてそんなふしだらな真似を神職の私がするとても！？」

男女七歳にして席を同じうせず！」

ものすつごく顔を赤らめて否定された。

「知り合いに男がいるからそこに泊めてもらいなさい。どうせ暇だろつし」

木漏れ日の射す森の中。

紅白の袖に引かれ、僕はとある場所を目指す。

『妖精の悪戯に惑わされないように』との名目らしいのだけど、
蝉のけたたましさが、一層男としての威厳の無さを笑っているよう
で惨めだ。

「ねえ、霊夢さん」

「畏まらなくても霊夢で良いわよ」

「じゃあ霊夢。幻想郷の蝉は毎年こうなのかな？」

「こう　？　ああ、煩いってこと？　そう言われれば今年は盛ん
ね」

今気づいたのか……。

ここまでで思ったのだけど、霊夢は怠惰なようで筋がある。面倒
と言っても頼まれればやる。

そんなつかみどころの無い飄々としていて、尚且つ鈍感（のふり
？）な性格であると思う。

紫さんといい霊夢といい、幻想郷の住人には、こちら側に無い一
種の余裕のようなものを感じる。

就職活動に忙殺されていた僕には羨ましく思う。

ふと、森が開ける。

太い木のが僕達の脇に聳えている。桜のようだ。

「春だったら綺麗なのにね　」
霊夢が独白する。

確かに、この大きさと満開なら、その姿は壮観なことだろう。

「あの店が私の知り合いの店」

いつの間にか僕の手を離し、先に歩いていく。

離された手が少し心残りでワテンポ遅れるが着いていく。

年季の入った看板には『香霖堂』と下手でも達筆でもない文字で

書かれている。

「霖之助さん、居るかしら？」

「ああ……外の蝉が騒がしいと思ったら霊夢が居たのか」

「私はミンミンなんて鳴かないわよ」

皮肉に満ちた、奥から若くとも老成した声が聞こえ、霊夢がむつとした声で返す。

と、奥の店主が起き上がる。

白髪で色白だが不健康なイメージはない。が、おおよそ接客には向かなさそうな不機嫌な表情。

「おや？ 見ない顔、というか外の人かな？」

眼鏡の位置を直し、僕の姿を認めると立ち上がる。

「残念だけど、向こう側に戻れるような道具は僕の店でも売ってないよ」

「違うわよ。暫くの間、春樹さんを泊めてあげて欲しいのよ」

「……………は？」

店主の眼鏡がずり落ちる。

「期間は？」

「飽きるまで」

「何で僕なんだ!？」

「男女七歳にきて席を同じゅうせず、よ」

「今回ばかりは正論だね……………」

はああ、と大きいため息を吐き椅子に座る。

「で、何で君はこんなことになっただんだい？」

店主は僕に向き直す。

「それが、僕は少し特殊なようで、僕が心から帰りたいと思わないと紫さんの境界すら通れないそうなんです」

「ははっ……………神隠しに遭いやすい体質ね……………」

哀れむような呆れるような声で苦笑いする。

「しかし、こっちに留まりたいなんて珍しいね」

「まあ、戻れない訳じゃないなら焦ることはないかと思ってまして」

「まったく、愚かなのか強いのか……」
言葉とは裏腹にどこか愉快そうだ。

「さて、分かった、引き受けよう。」

外の人間の話の聞けるのは僕にとっては有益だからね。
だけど、これも商売だ。有償なのは分かっているよね？」

「私に対価を求めるのはお門違いよ」

霊夢は肩を竦める。

「分かっているさ。今回は春樹くんに払ってもらおうよ」

「お金もそんなに持ってないんですけど……」

「そちら側の貨幣なんて幻想郷じゃ紙切れと鉄屑さ。体で払ってもらうよ」

僕は肩を抱いて身を守る。

「僕はノンケだよ！？ 勘違いしないでくれ、掃除とか買い出しとかのことだよ」

「あ、ああ………そうですよね」

一瞬、アルバイト先の店長（男色家35歳ノ）を思い出してしまった。

「まあ、手始めに」

ドカンッ！！

壁が豪快に吹っ飛び黒づくめの何者かが入ってくる。

「よう霖之助、八卦炉の調子が悪いんだ。あと、霊夢が居て邪魔だったから壁から入ったぜ」

青筋を浮かべた店主は笑顔で僕にこう言った。

「春樹くん、悪いけど木材買ってきてくれないかな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332y/>

幻想写真館 - The fantastic girls photoed in the summer -

2011年11月24日02時47分発行